

# 王陽明佛刹巡歷年譜會要〔一〕

久須本文雄

世系

陽明、諱は守仁、字は伯安、姓は王氏なり。其の先は晋の光祿大夫王覽の後裔にして、覽は元、瑯琊（山東、青州府）に住みしが曾孫右軍將軍王羲之に至り、移りて會稽山陰に居る。第二十三世の裔迪功郎王壽始めて達溪より餘姚に移りて以后子孫世々此に住す。王壽より五世の孫王綱、文武の才あり、明朝創業の時、劉伯溫、薦めて兵部郎中となし廣東參議に拔擢され苗賊の難に死す。王綱の孫、王興準は遁石翁と稱し禮易に精通し易微改千言を著作す。其の子世傑、槐里子と稱呼され、明經を以て大學の貢に應じ、其の子、倫、字は天叙、竹軒と號し陽明の祖父にして竹軒稿、江湖雜稿、等の著作あり。父華、字は德輝、海日翁と號し嘗て龍泉山中に於て讀書せ

しに因み學者龍山先生と稱謂す。龍山公進士第一等に擧げられ南京吏部尙書に至る。常に浙江山陰の風光佳麗にして又先世の故居たるを思ひ姚より越城（紹興府東南十里）の光相坊に徙りて茲に居る。面して餘姚に在りし時成化七年辛卯、鄭氏を娶り翌年陽明も生む。龍山公に龍山稿、垣南草堂稿、禮經大義、雜錄、進講錄抄等の著作あり。陽明嘗て室を四明山の陽明洞に築きしを以て學者咸、陽明先生と稱呼するに至れり。陽明異母弟妹四人即ち繼室趙氏に一男（守文）一女（徐愛に嫁す）、又側室楊氏に守儉、守章の二子あり、陽明の忠孝兩全の思想は蓋し間接的には曩祖以後の純篤守正の高風と直接的には祖父竹軒公及び祖母岑氏、父龍山公の忠孝的薰陶とに因り發せしならん。蓋し陽明の思想性格共に其の遺傳的素質を

多分に受くるを見る。之より陽明年譜の要旨を記し併せて陽明の禪的雰圍氣就中訪歷禪刹等を附記せん」とす。

一歳、憲宗成化八年壬辰、皇紀二二三二、西紀一四七二  
生餘姚 九月三十日

太夫人鄭氏懷娠十四ヶ月を経て浙江餘姚にて陽明を生む。祖母岑氏一夜神人の緋衣佩玉を着けて雲中より鼓吹し來り一兒を授くるを夢みしが故に祖父竹軒公は雲と命名し鄉人其の生室を瑞雲樓と呼ぶ。之我が後土御門帝文明四年にして足利八代將軍義政の時代に當る越の一帯は風光佳勝、土地肥沃、物産豐饒の故に思案、翰墨の士多く、且、其の近郊に禪刹の多きを以て兩雰圍氣上蓋し亦陽明の禪的形而上學的思想醗酵の間接的一素因ともなりしを見る。

〇〇 後年陽明が少からず影響を受けし心友湛甘泉、二歳にして羅整庵八歳なりき

五歳、成化十有二年丙申、皇紀二二三六、西紀一四七六  
在越 〇〇 陽明五歳迄啞の如く言を發せず。一神僧曰く「好箇孩兒可惜(名字)道破」と。

困りて竹軒、守仁と改名せしより能くもの言ひき。

〇〇 一日祖父竹軒の書を默記す。

十歳、成化十有七年辛丑、皇紀二二四一、西紀一四八一  
皆在越 父龍山公進士第一甲第一人に戀げられ

赴任前王氏家族皆浙江越城にて消光す

十一歳 成化十有八年壬寅、皇紀二二四二、西紀一四八二。  
(寓北京) 發越 〇〇 龍山公は竹軒公を迎養するに際し、陽

明竹軒に従つて越を發し北京に赴く。

過鎮江  
赴北京

〇〇 途次江蘇の鎮江、金山寺及び蔽月山房に遊び詩を賦して非凡の文才を現はす

金山寺詩を賦して曰く

金山一點大如拳 打破維揚水底天

醉倚妙高台山月 玉簫吹徹洞龍眠

(全書本譜、十一歳の項)

と又、蔽月山房詩を賦して曰く

山近月遠覺月小 便道此山大於月

若人有眼大如天 還見山小月更闊

(同上)

と、此の兩詩に徴しても已に超脫的禪機の萌芽を見るに足り、且、此の頃より以後、佛教殊に禪房の歴訪多きは彼の禪的雰圍氣考察上重視すべきなり。

十二歳 成化十有九年癸卯、皇紀二二四三、西紀一四八

三、

寓北京

〇〇

塾師及び家君龍山公に就きて學び、且大學に往きて學を受く。豪邁不羈の資質此の頃より益々現はれ常に仁俠の事

を好む。

〇〇

嘗て同塾生と北京長安街に赴き一相士に遇ひ陽明に語りて曰く

鬚拂領、其時入聖境、鬚至上丹台

其時結聖胎、鬚至下丹台、其時聖果

圓 (全書、年譜、十一歳の項)

〇〇

と。これは靜座の方法と其の効果とに就きて教示せし物にして其の言に感動して爾後、潛心誦讀し靜座凝思に力む之禪の靜座澄心見性成佛への初入的段階をなす物ならん。歸塾して塾師と問答し「讀書學聖賢」(同上)を以て天下第一等の事となす。之人生の眞諦を道破せし一大不朽的文字にして爲聖作佛の志向已に此の時にありしなり。

此の年門生泰州の王心齋生る。

十三歳 成化二十年甲辰、皇紀二二四四、西紀一四八四

寓北京 ○○ 母太夫人鄭氏壽四十有一にして卒し哭

泣甚だ哀む。其の後は、公の愛妾の態度を憎嫌して小童ながら屢々智略を用ふ。之陽明の禪機及び兵略の考察上留意に値す

十五歲 成化二十有二年丙午、皇紀二一四六、西紀一四八六、(寓北京)

遊居庸三關 ○○ 常に伏波將軍を私淑し四方を經略するの大志あり、居庸の三關(南口、居庸、上關)に遊び諸夷の部落を訪ひ備禦の策を聞き、胡兒を逐ひ騎射の術を講ずる等して一閱月後歸る。陽明十有五、六歲頃は湛甘泉の「陽明先生墓誌銘」(全書卷三七所收)に所謂「初溺於任俠之習」の時期に相當するならん。

○○ 明年門生永豐の聶雙江、餘姚の徐橫山(愛)、陝西渭南の南瑞泉(大吉)生る。

十七歲 孝宗弘治元年戊申、皇紀二一四八、西紀一四八

八、(前半歲餘姚、後半歲南昌)

歸餘姚赴江西 ○○ 餘姚に歸省して後、江西洪都に赴く。在南昌 七月 江西布政司參議諸養和の女を親迎し結婚の當日飄然として道教寺院の鐵柱宮に至り、道士に神仙養生の術を聞き對座沈思冥想して遂に歸宅を忘る。陽明

洪都の諸養和の官署に於て書法を學び大に進む、陽明は遂に仙家養生の旨說到留念するに至り苟も合の禮を忘却して一道士と對座談仙するが如きは之彼が道教思想への憧憬的嚆矢をなし且所謂「四溺於神仙之習」の端初にして如何に求道の念切なるかを窺知するを得べし。

寓南昌 自八月至十二月 夫人諸氏親迎後は洪都養和の官署に年内寓居し或は仙旨に、或は書法に、或

は聖學に専念せし物と見るべし。

十八歳 弘治二年己酉、皇紀二二四九、西紀一四八九

寓南昌自十一月至十一月 前年八月以後の志向と蓋し大差なし。

過廣信 歸餘姚 十二月 夫人諸氏と共に餘姚に歸省の途次、水路にて江西の廣信村上饒に至り婁一齋

(時に齡六十有八)に謁して宋儒格物致知の旨を聞き、飄然聖學に志慕す。陽明は一齋によりて道學的感化を享けしのみならず又、一齋を通じて其の學系に屬する吳康齋の禪風に鮮からず影響を受けしならん。一齋に謁せしは全書、及び全集の年譜及び行狀には十八歳の時と記せしが、明史(卷一九五)及び明史稿(列傳八十)に「年十七謁上饒婁諒與朱子格物」として十七歳の時となし、又陽明墓誌銘にも十七歳の時と記す、予姑く疑存するも年譜の説に據る。

十九歳 弘治三年庚戌、皇紀二二五〇、西紀一四九〇

在越 ○○ 龍山公外艱を以て餘姚に歸り從弟冕階宮及び妹婿牧に命じて陽明と共に經義を講析せしむ

○○ 一日諧謔豪放磊落和易なりしを悔ひ爾來端座省言謹嚴沈默の性格となれり。

○○ 明年弘治四年辛亥陽明齡二十の年、江西安福の門生鄒守益生れ且、曾て教を受けし婁一齋齡七十にして卒す。

二十一歳 弘治五年壬子、皇紀二二五二、西紀一四九二

(前半歳在越、後半歳在北京)

在越 ○○ 浙江の鄉試に推舉さる。祖父竹軒公北京にて卒せしを以て、父龍山公其の喪を奉じて越に歸り、已にして上京す。

赴北京 ○○ 後、陽明も京師に赴き、朱子の遺書を涉獵して宋儒格物致知の學をなせしも

窮理の至難を知り辭章の學に就く。

二十二歲 弘治六年癸丑、皇紀二二五三、西紀一四九三  
在北京 春季會試に應ぜしも下第す。

と。(全書卷一九外集一、京師詩内)  
〇〇 此の年、門生餘姚の錢緒山及び江西泰和の歐陽德生る。

二十五歲 弘治九年丙辰、皇紀二二五六、西紀一四九六  
(前半歲在北京)  
(後半歲在越)

寓北京 春 再び會試に應ぜしも登第せず。

歸越 〇〇 後、越に歸省して詩社を浙江餘姚の西

方龍泉山寺に結び、雄を詞賦に競ふ、

弘治十八年乙丑、陽明三十四歲兵部主事に任ぜられ、北京に在りし時の詩なるが此の詩賦に興ぜし龍泉山寺に憶を馳せ詩を賦して曰く

憶龍泉山

九八

我愛龍泉寺、寺僧頗疎野、盡日坐井

寓北京

欄、有時臥松下、一夕別山雲、三年走車馬、媿殺嶽下泉、朝夕自清瀉、

二十六歲 弘治十年丁巳、皇紀二二五七、西紀一四九七  
寓北京 當時、邊警頻りに至るも、輒略統御の材あるもの鮮きを慨歎し奮然専ら武事に留念して兵家の祕書を精研せざるなく、賓宴に遇ふ毎に、果核を聚め陣勢をなし、開闔進退の法を指示して戲となす。是、後年征討に勳功を立つるの素養、蓋し已に此の時にありしを見る

二十七歲 弘治十有一年戊午、皇紀二二五八、西紀一四九八  
辭章藝能の終に至道に通するに足らざるを念ひ、聖學に志向せんとせしも、亦其の企及し得ざるを歎じ、再び初志

を挫折して神仙養生の術を好み、遂に

遁世入山の意を醗釀す。蓋し、所謂「

四溺於神仙之習」は此の時期の前後を

指示する物ならん

〇〇 此の年、門生浙江山陰の王龍溪生る。

〇〇 歸浙江 〇〇 國學基本叢書本全書卷二〇外集二、一

二七頁に「嘉靖甲申冬二十一日、再登

秦望、自弘治戊午登後二十七年矣。」と

あるを以て二十七歲浙江に歸省して秦

望山 浙江杭州に登りしならん。

二十八歲 弘治十有二年己未、皇紀二二五九、西紀一四

九九

寓北京 春 廷試に會し南宮第二人に擧げられ二甲

進士出身第七人觀政工部を賜ふ。之、

陽明任官の始をなす。

往河間 秋 命を受けて河間(河北省)に赴き威寧伯

の墳墓造築を監督し、什伍の法、及び

八陣の圖を以て造墳に當る。

寓北京 〇〇 工事畢りて復命の日、邊務八事(陳言

邊務疏、全書卷九所收)を奏上す。

二十九歲 弘治十有三年庚申皇紀二一六〇、西紀一五〇

〇

在北京 〇〇 刑部雲南清吏司主事を授けらる。

三十歲 弘治十有四年辛酉、皇紀二一六一、西紀一五〇

一(在北京)

赴江北 〇〇 命を奉じて江北(淮甸)を審録す。

遊九華山 自春 間事竣りて便道、安徽の九華山に遊び無

相、化城諸刹に宿し道者、蔡と談仙す

此の時、九華山に遊ぶの詩の外、無相

化城兩刹の詩を賦して曰く

九華山賦

循長江而南下、指青陽以幽討、啓鴻

濛之神秀、發九華之天巧、非效靈於

坤軸、孰構奇於玄造，涉五溪而徑入宿無相之窈窕，訪王生於蓬谷掬金沙之清潦，凌風雨乎半霄，登望江而遠眺，步千仞之蒼壁，俯龍池於深容，吊謫仙之遺跡，躋化城之縹緲。欽鉢孟之朝露，見蓮花之孤標，扣雲門而望天柱，列仙舞於晴昊，儼雙椒之闢門，真人駕陽雲而獨躋羣蓋平臨乎石照，綺霞掩映乎天姥，二神升於翠微九子鄰於積稻，炎燄起於玉甌，爛石碑之文藻，回澄秋於枕月，建少微之星，覆甌承滴翠之餘瀝，展旗立雲外之旌纛，下安禪而步逍遙，覽雙泉於松杪，踰西洪而憩黃石，懸百丈之灝灝瀨流觴而縈紆，遺石船於澗道，呼白鶴於雲峯，釣嘉魚於龍沼，倚透碧之嵒岬，謝塵寰之粉擾，攀齊雲之峻，鑑琉璃之浩，沿東而西歷殫

九節之蒲草，橙人導余以冥探，排碧雲之瑤島，羣巒翳其繆藹，失陰陽之昏曉，垂七布之沉沉，靈龜隱而復佻，履高僧而屢招賢，開白日之杲杲，試明茗於春陽，汲垂雲之淵湫，凌繡壁而據石屋，何文殊螺髻之蟠糾，梯拱辰而北盼墮遺光於拾寶，緇裳於黃苑，休圓寂之幽僧，鳥呼春於叢篁，和雲韶之，喚起促余之晨興，落星河於簷掠，護山嚶其驚飛，恠遊人之太早，攬卉木之如濯，被晨暉而爭姣，靜鐘聲之剝啄，幽人勵參巖於冥杳，碧鷄噉於青林，翻雲而失皓，隱搗藥於樛蘿，狹提壺餅焦而翔繞，鳳凰承孟冠以相遺，飲沆之仙醪，羞竹實以嬉翺，集梧枝之嫋嫋，嵐欲雨而霏霏，鳴濕濕於葦葆，躡三遊而轉青峭，拂天香於茫渺，席泓潭以濯



纓、浮桃瀉而揚縞，淙漸漸而落蔭，  
飲猿猱之捷狡，睨斧柯而昇大，還望  
會仙於雲表，憫子京之故宅，款知微  
之碧桃，倏金光之閃映，睫累景於穹坳，  
弄玄珠矜赤水，舞千尺之潛蛟，並花  
塘而峻極，散香林之迴颺，撫浮屠之突兀，  
泛五釵之翠濤，襲珍芳於絕巘，曼金  
步之搖搖，莎羅躑躅芬敷而燦爛，幢  
玉女之妖嬌，寒龍鬚於靈寶，墮鉢囊  
之飄飄，開仙掌於嵌，散青驛之迢  
迢，披白雲而躡崇壽，見參錯之僧寮，  
日既夕而山冥，掛星辰於籐，宿南台  
之明月，虎嘯而龍吟，鹿麋羣遊於  
左右，若將侶幽人之岑寥，迥高寒其  
無寐，聞冰壑之洞簫，溪女厲晴瀧而  
曝朶，雜精苓之春苗，邀予觴以玉液，  
飯玉粒之瓊瑤，溘辭予而遠去，颯霞  
裾之飄飄，復中峯而悵望，或仙蹤之

可招，迺下見陽陵之蛺蝶，忽有感於  
子明之宿要，逝予將遺世之獨立，採  
石芝於層霄，雖長處於窮僻，迺永離  
乎羣波蒼黎之緝緝，固吾生之同胞  
苟顓連之能濟，吾豈靳於一毛，矧狂  
胡之越獄，王師局奔勞，吾寧不欲請  
長纓矜闕下，快平生之鬱陶，顧力微  
而任重，懼覆敗於或遭，又出位以圖  
遠，將無諄於鷦鷯，嗟有生之迫隘，  
等滅沒於風泡，亦富貴其奚爲，猶榮  
薌之一朝，曠百世而興感，蔽雄傑於  
蓬蒿，吾誠不能同草木而腐朽，又何  
避乎羣喙之呶呶，已矣乎，吾其鞭風  
霆而騎日月，被九霞之翠袍，搏鵬翼  
於北溟，釣三山之巨鰲，道崑崙而息駕  
聽王母之雲歌，呼浮丘於子晉，招勾  
曲之三茅，長遨遊於碧落，共太虛而逍  
遙，亂曰，蓬壺之藐藐兮，列仙之所

逃兮，九華之矯矯兮，吾將於此巢兮，  
匪塵心之足攪兮，念鞠育之劬勞兮，  
苟初心之可紹兮，永矢弗撓兮。

と。（全書卷一九、外集一）

夜宿無相寺

春宵臥無相，月照五溪花，掬水洗雙  
眼，披雲看九華，巖頭金佛國，掬杪  
謫仙家，彷彿聞笙鶴，青天落絳霞，

（同上，歸越詩內）

無相寺三首

老僧巖下屋，繞屋皆松竹，朝聞春鳥  
啼，夜伴巖虎宿，

坐望九華碧，浮雲生曉寒，山靈應秘惜  
不許俗人看，

靜夜聞林雨，山靈似欲留，只愁梯石  
滑，不得到峯頭（同上）

化城寺六首

化城高住萬山深，樓閣憑空上界侵，

天外清秋度明月，人間微雨結浮陰，  
鉢龍降處雲生座，巖虎歸時風滿林，  
最愛山僧能好事，夜堂燈火伴孤吟。  
雲裏軒窗半上鉤，望中千里見江流，  
高林日出三更曉，幽谷風多六月秋，  
仙骨自憐何日化，摩緣翻覺此生浮，  
夜深忽起蓬萊興，飛上青天十二樓。  
雲端鼓角落星斗，松頂袈裟散雨花，  
一百六峯開碧漢，八十四梯踏紫霞，  
山空仙骨葬金榔，春暖石芝抽玉芽，  
獨揮談塵拂煙霧，一笑天地真無涯。  
化城天上寺，石磴入星躔，雲外開丹  
井，峯頭耕石田，月明猿聽偈，風靜  
鶴參禪，今日楷雙眼，幽懷二十年。  
僧屋煙霏外，山深絕世譁，茶分龍井  
水，飯帶石田砂，香細雲嵐雜，窗高  
峯影遮，林棲無一事，終日弄丹霞。  
突兀開穹閣，氤氳散曉鐘，飯遺黃稻

粒、花發王叙松、金骨藏靈塔、神光照遼峯、微茫意何是、老衲話遺宗。

(同上)

と。蓋し所謂「五溺於佛氏之習」の如く釋教殊に禪教に心を寄せしは此の前後の時期ならん。

三十一歲 弘治十有五年壬戌、皇紀二二六二、西紀一五

〇二

歸北京 五月 此の月、京師に復命し後遂に志を詞章に絶つ。

歸 越 八月？涙を以て歸養を乞ひ、室を浙江四明山寓四明山

の陽明洞中に築き導引の術を修せしも後仙釋の非を悟る。

赴蕭山 〇〇 歸赴の途次か或は歸越後か將又、西湖

への赴途か其のいづれかは斷定し難けれども蕭山の牛(浮)峯寺を訪歴せしなり。

此の浮峯寺に遊ぶの詩を賦して曰く。

遊牛峯寺四首

洞門春靄敞深松、飛磴纏空轉石峯、  
猛虎踞厓如出柙、斷螭蟠頂訝懸鐘、  
金城絳闕應無處、翠壁丹書尚有踪、  
天下名區皆一到、此山殊不厭來重、  
縈紆鳥道入雲松、下數湖南百二峯、  
巖犬吠人時出樹、山僧迎客自鳴鐘、  
凌巖陟險眞殊病、異日探奇是舊踪、  
欲扣靈關問丹訣、春風蘿薛隔重重、  
偶尋春寺入層峯、曾到渾疑是夢中、  
飛鳥去邊懸棧道、馮夷宿處有幽宮、  
溪雲晚度千巖雨、海月涼飄萬里風、  
夜擁蒼厓臥丹洞、山中亦自有王公、  
一臥禪房隔歲心、五峯煙月聽猿吟、  
飛湍映樹懸蒼玉、香粉吹香落細金、  
翠壁年多霜蘚合、石牀春盡雨花深、  
勝遊過眼俱陳迹、珍重新題滿竹林。

(全書卷一九、外集一)

又四絕句

翠壁看無厭、山池坐益清、深林落輕  
葉、不道是秋聲。

恠石有千窟、老松多半枝、清風灑巖  
洞、是我再來時、

人間酷暑避不得、清風都在深山中池  
邊一坐卽三日、忽見巖頭碧樹紅、

兩到浮峯興轉劇、醉眠三日不知還、  
眼前風景色色異、惟有人聲似世間、

(同上)

寄浮峯詩社

晚涼庭院坐新秋、微月初生亦滿樓、  
千里故人誰命駕、百年多病有孤舟、  
風霜草木驚時態、砧杵關河動遠愁、  
飲水曲肱吾自樂、堂今在越溪頭、

(全書卷二〇外集二、州詩內)

三十二歲 弘治十有六年癸亥、皇紀二二六三西紀一五〇

三

在西湖

〇〇 錢塘の西湖に移つて疾を養ふかたはら

南屏虎跑の諸刹に屢々往來せしなり。

此の西湖に就きて詩を賦して曰く。

西湖醉中謾書二首

十年塵海勞魂夢、此日重來眼倍清、  
好景恨無蘇老筆、乞歸徒有賀公情、  
白鳧飛處青林晚、翠壁明邊返照晴、  
爛醉湖雲宿湖寺、不知山月墮江城、  
掩映紅粧莫謾猜、隔林知是藕花開、  
共君醉臥不須到、自有香風拂面來、

(全書卷一九、外集一)

西湖醉中謾書

湖老激澗晴偏好、此語相傳信不誣、  
景中況有佳賓主、世上更無眞畫圖、  
溪風欲雨吟提樹、春水新添沒渚蒲、  
南北雙峯引高興、醉携青竹不須扶、

(全書卷二九續篇四)

と、一禪僧を懇諭して孝養を遂げしめしは此の時なり。陽明一日虎跑寺に遊び無言の禪僧を見て直ちに「這和尚終日口巴巴說甚麼」。(全書年譜三十一歳の項)と喝破し、其の閉目靜座するを見て「終日眼睜睜看甚麼」(同上)と勘檢せしは其の手腕禪家に劣らざるを見る。此の僧は禪を會せざるに反し却て陽明が禪旨を會せし物でかく三十二歳頃は頗る禪機に悟入せし所あるを見る

三十三歳 弘治十有七年甲子、皇紀二一六四西紀一五〇

四

在北京 春夏 養疾を畢りて上京し夏季迄在京す。

赴山東 秋 巡按山東監察御史陸偁は山東鄉試を主

考せしむ。「鄉試錄」(全書卷三二所收)出でて世人陽明に經世の才あるを知る

王陽明佛刹巡歷年譜會要(一)

此の頃に上古支那の文化、政治上の中心なりし泰山に登攀せしなり。

遊泰山

飛湍下雲窟、千尺瀉高寒、昨向山中見、眞如畫裏看、松風吹短鬢、霜氣肅羣鸞、好記相從地、秋深十八盤、(全書卷二九、續篇四、)

登泰山五首

曉登泰山道、行行入烟霏、陽光散巖壑、秋容淡相輝、雲梯掛青壁、仰見蛛絲微、長風吹海色、飄飄送天衣、峯頂動笙樂、青童兩相依、振衣將往從、凌雲忽高飛、揮手若相待、丹霞閃餘暉、凡軀無健羽、悵望未能歸、

二

天門何崔嵬、下見青雲浮、泱泱絕人世、迥豁高天秋、暝色從地起、夜宿天上樓、天鷄鳴半夜、日出東海頭、

(一三)

隱約蓬壺樹、縹緲秩桑洲、浩歌落青冥、遺響入滄流、唐虞變楚漢、滅沒如風漚、藐矣鶴山僊、秦皇豈堪求、金砂費日月、顏顏竟難留、吾意在龍古、冷然馭涼、相期廣成子、太虛顯遊、枯槁向巖谷、黃綺不足儔。

三

窮厓不可極飛步凌烟虹、危泉瀉石道空影垂雲松、千峯互攢簇、掩映青芙蓉、高台倚巉削、傾側臨崆峒、失足墮烟霧、碎骨顛厓中、下愚竟難曉、摧折紛相從、吾方坐日觀、披雲笑天風、赤水問軒後、蒼梧叫重瞳、隱隱落天語、闔闔玲瓏、去去勿復道、濁世將焉窮。

四

塵網苦羈縻、富貴眞露草、不如騎白鹿、東遊入蓬島、朝登太山望、洪濤

隔縹緲、陽輝出海雲、來作天門曉、遙見碧霞君、翩翩起員嶠、玉女紫鸞笙、雙吹入晴昊、舉首望不及、下拜風浩浩、擲我玉虛篇、讀之殊未了、傍有長眉翁、一一能指道、從此煉金砂人間跡如掃。

五

我才不救時、匡秩志空大、置我有無間、緩急非所賴、孤坐萬峯巔、嗒然遺下塊、已矣復何求、至精諒斯在、澹泊非虛杳、灑脫無芥蒂、世人聞予言、不笑即吁怪、吾亦不强語、惟復笑相待、魯叟不可作、此意聊自快、(全書卷一九、外集一、山東詩內)

八月「山東鄉試錄」成。

歸北京 九月 兵部武選清吏司主事に改任せられ、京

師に赴任す。

〇〇 此の年門生吉水の羅念菴生る。

三十四歲 弘治十有一年乙丑皇紀二一六五、西紀一五〇

五

在北京 ○〇 是歲門弟始めて進む。講學に専念する

外後年永く心友として切磋の功を受け

し翰林庶吉士湛甘泉（西紀一五六〇世

宗嘉靖三十九年齡九十五を以て卒す）

と親交を結び共に聖學を唱明す。陳自

沙の門弟湛甘泉を通じて白沙の禪的思

想が陽明に影響を及せしこと鮮からず

三十五歲 武宗正德元年丙寅 皇紀二一六六、西紀一五

〇六

在北京 二月 南京の科道官戴銑上疏して宦官劉瑾を

諫争せし廉に依り詔獄に下されしため

陽明告疏して之を救はんとせしも、却

つて劉瑾の怒に觸れて罰杖を被り、詔

獄に下されて貴州龍場驛丞に貶謫せら

る。

三十六歲 正德二年丁卯、皇紀二一六七、西紀一五〇七

至錢塘 初夏 謫地に赴かんとして錢塘に至り、疾を

得て浙江杭州の鳳凰山の勝果寺及び西

湖の靜慈寺に止まる

移居勝果寺二首

江上但知山色好、峯廻始見寺門開、

半空虛閣有雲住、六月深松無暑來、

病肺正思移枕簟、洗心兼得遠塵埃、

富春咫尺烟濤外、時倚層霞望釣台。

病餘巖閣坐朝暉、異景相新得未聞、

日脚倒明千頃霧、雨聲高度萬峯雲、

越山陣水當吳嶠、江月隨潮上海門、

便欲携書從此老、不教猿鶴更移文。

（全書卷一九、外集一赴謫詩內）

臥病靜慈寫懷

臥病空山春復夏、山中幽事最能知。

雨晴諧下泉聲急、夜靜松間月色遲、  
把卷有時眠白石、解纓隨意濯清漪、  
吳山越嶠俱堪老、正奈燕雲繫遠思、  
(同上)

南屏

溪風漠漠南屏路、春服初成病眼開、  
花竹日新僧已老、湖山如舊我重來、  
層樓雨急青林迥、古殿雪晴碧嶂迴、  
獨有幽禽解相信、雙飛時下讀書台。

(同上)

と、

至舟山島○○

時に劉瑾の徒に會ひ、江に投すと託言  
して、舟山島(餘姚の東方)に遁走す。

着福州○○

更に舟山島より浙江の沿岸の海上を南  
西に向ひしも、偶々颶風に遇ひ福州に  
漂着す。

過崇安○○  
武夷山○○

福州より福建崇安に至り更に武夷山を  
越へて江西に入る。猛虎の棲窟なりし

一古寺の野祠に宿せしは福州より武夷  
山の間にして此の時、古寺の壁間に一  
詩を書し洒々落々たる赴謫の心境を表  
示せしなり。

泛海

險夷原不滯胸中、何異浮雲過太空、  
夜靜海濤三萬里、月明飛錫下天風  
(全書卷一九、外集一、赴謫詩内)

過鉛山○○

江西の鉛山を過ぎ廣信府に赴く。

過廣信○○

廣信府上饒縣を過ぐ。陽明は此の時恩  
師高瀨博士「王陽明詳傳」(五四頁)及  
び安岡正篤「王陽明研究」(七二頁)に  
依れば復び婁一齊に謁せしとすれども  
一齊は弘治四年陽明二十歳の時年七十  
を以て既に十七年前卒せしを以て婁一  
齊との再會説は信じ難し。

過鄱陽○○  
至南京○○

父龍山公は南京吏部尙書なりしを以て  
鄱陽(江西饒州)より湖を経て南京に赴



歸錢塘十二月  
赴龍場

きて會す。

南京より便道錢塘に歸省し、廣信、南昌、樟樹、醴陵、湘陰、常德、辰州を経て龍場を赴く、此の時、徐愛、蔡宗兗、等贊を納れて入門の禮をなす。

自十二月  
至三月

赴謫の途次、萍鄉の武雲觀、醴陵の泗洲寺、石亭寺、善化の岳麓山、常德の德山寺、辰州の虎溪龍興寺、等を歴訪せしなり。尙赴謫の途次か或は廬陵より北京に赴く(三十九歳)途次に江西瑞州高安の洞山功德寺か或は南京の功德寺かを訪歴せしならん。

萍鄉道中謁濂溪祠

木偶相沿恐未眞、清輝亦復凜衣巾、  
簿書曾屑乘田吏、俎豆猶存畏壘民、  
碧水蒼山俱過化、光風霽月自傳神、  
千年私淑心喪後、下拜春祠薦渚蘋。

(全書卷一九、外集一赴謫詩内)

宿萍鄉武雲觀

曉行山徑樹高低、雨後春泥沈馬蹄、  
翠色絕雲開遠嶂、寒聲隔竹隱晴溪、  
已聞南去艱舟楫、漫憶東歸沮杖藜、  
夜宿仙家見明月、清先還似鑑湖西。

(同上)

夜泊石亭寺、用韻呈陳婁諸公因寄

儲柴墟都憲及喬白巖太常諸友

廿年不到石亭寺、惟有西山只舊青、  
白拂掛牆僧已去、紅闌照水客重經、  
沙村遠樹凝春望、江雨孤篷入夜聽、  
何處故人還笑語、東風啼鳥夢初醒。

悵望沙頭成久坐、江洲春樹何青青、  
烟霞故國虛夢想、風雨客途眞慣經、  
白壁屢投終自信、朱絃一絕好誰聽、  
扁舟心事滄浪舊、從與漁人笑獨醒。

(同上)

醴陵道中風雨夜宿泗洲寺次韻

風雨偏從險道嘗、深泥沒馬陷軍箱、  
虛傳鳥路通巴蜀、豈必羊腸在太行、  
遠渡漸看連暝色、晚霞會喜見朝陽、  
水南昏黑投僧寺、還理義編坐夜長。

(同上)

辰州虎溪龍興寺聞楊名父將到留韻

壁間、

杖藜一過虎溪頭、何處僧房是惠休、  
雲起峯頭沉閣影、林疎地底見江流、  
煙花日煖猶含雨、鷗鷺春閒欲滿洲、  
好景同來不同賞、詩篇還爲故人留、

(同上)

德山寺次壁間韻

乘與看山薄暮來。山僧迎客寺門開、  
雨昏碧草春申暮、雲捲青峯善卷台、  
性愛煙霞終是僻、詩留名姓不須猜、  
岩根老衲成灰色、枯坐何年解結胎。

(同上)

泗洲寺

淶水西頭泗洲寺、經過轉眼又三年、  
老僧熟認直呼姓、笑我清癯只似前、  
每有客來看宿處、詩留佛壁作燈傳、  
開軒掃榻還相慰、慚愧維摩世外緣。

(同上)

夜宿功德寺次宗賢韻二絕

山行初試夾衣輕、脚軟黃塵石路生、  
一夜洞雲眠未足、湖風吹月渡溪清、  
水邊楊柳覆茅楹、飲馬春流更一登、  
坐久遂忘歸路夕、溪雲正瀉暮山青。

(全書卷二〇、外集二、京師詩內)

三十七歲 正德三年戊辰、皇紀二二六八、西紀一五〇八

至龍場 春 沉湘を経て龍場(修文縣)の謫地に至る

在龍場 龍場に於て千辛萬苦の極遂に格物致知

の旨を省悟し、然後 五經應說(「五經

應說十三條」全書卷二六所收)及び「五

經應說序(全書卷二二所收)を著作す。

「五經應說」は謫居中一年七ヶ月を費して著作せし物にして「五經應說序」末に「夫說風四十六卷、經各十而禮之說尙多缺僅六卷云」とて元、全部四十六卷ありしか如くなるも後散逸し德洪僅か十三條を得て之を傳ふ。龍場の省悟は眞に三十有六年困迷の賜物にして實に斯學の基因をなし陽明の性格及び學風の兩見地上注視に値する時期にして禪學的觀點よりしても看過すべからざるなり。悟徹以後専ら教化に力めし結果地方の官吏、專族、咸信服して敬を致し教を乞ひ又、夷人親狎して龍場書院等の諸宇を新築する等民風頓に改まり教化大に行はる。之、佛教に所謂上求菩提(自覺)下化衆生(覺他)の境地とも見るべきなり。

三十八歲 正德四年己巳。皇紀二一六九、西紀一五〇九

在貴陽 〇〇 貴州の提學副使席元山の爲めに知行合一の妙旨を五經諸子に證して教示す。

之、知行合一論を提唱せし始にして凡そ陽明教學三變遷の中第一變期(居貴陽時)に屬する物と謂ふべきなり。彼の知行合一説は禪の所謂修證一如、定慧不二、覺行圓滿の妙旨と類す。

〇〇 後、席書は毛憲副と共に貴陽書院を修葺し陽明を聘して主たらしむ。

三十九歲 正德五年庚午。皇紀二一七〇、西紀一五一〇

發龍場昨年末赴廬陵一月 逆閹劉瑾誅せられて赦宥の恩命に浴し

江西廬陵(吉安)縣知縣に陞任せられ任地に赴く。

過辰州常德 二月? 貴陽より廬陵に赴く途次、湖南の辰州

(沅陵)及び常德を過ぐ。其の辰州、常

德を過ぐるの一路舊門冀元享、蔣信、劉觀時、等に會し説くに靜座の要を以てし共に僧房に靜座して本來固有の心體を見徹せん事を勸む、此の時、冀、蔣、劉三子に教示して曰く。

謫居兩年、無可與語者、歸途乃幸得諸友、悔昔貴陽學知行合一之教、紛々異同、罔知所入、茲來乃與諸生靜座僧寺、使自悟性體、顧恍々若有可即者(全書卷三二、年譜三十九歲項)と、又途中書を寄せて曰く、

前在所云靜坐事、非欲坐禪八定也、蓋因吾輩平日爲事物紛拏、未知爲己、欲以此補小學收放心一段功夫耳、(同上)

と。此の靜坐の要を説くは龍場以降陽明の新教旨にして、證に伴ふべき必然の修、換言せば修證一如底の妙境たる

べく禪的にも重要な觀點たり。

至廬陵 三月 任地廬陵に至り、僅か仕七閱月なりしも治績鮮からず。

在廬陵自三月至十月間 在任中、香社寺(吉安近郊)に遊ぶ。

午憩香社寺

脩程動百里、徃徃餉僧居、佛鼓迎官急、床禪爲客虛、桃花成井落、雲水接郊墟、不覺沲塗澀、看山興有餘。

(全書卷二〇、外集二、廬陵詩內)

入北京 十一月北京に至り朝覲して大興隆寺に館し、

入京の翌日、湛甘泉等と會し學を講ずる命降る。此の頃、陽明實踐の功を論じ門生に教示して曰く

聖人之心如明鏡、纖翳自無所容、自不消磨刮、若常人之心、如斑垢駁蝕之鏡、須痛刮磨一番、盡去駁蝕、然後纖塵即見、纔拂便去、亦不消費力

到此已是識得仁體矣、若駁蝕未去、其間固自有一點明處、塵埃之落、固亦見得纔拂便去、至于堆積於駁蝕之上終弗之能見也。

と。

(全書卷三二、年譜一、三十九歲十二月頃)

之、蓋し六祖壇經の思想と轍を同じくする物で、其の他陽明の思想と壇經の思想と相通する所鮮からず。按するに陽明は六祖壇經の思想の影響を多分に受くるを認むる物で兩思想との關係論は後日發表せんとす。王陽明先生全集年譜には十一月と記し、全書卷二〇、外集二、には十月と記すると雖も予は全書、年譜の説に據る。

在北京 正月

湛甘泉は陽明の講學を發せん事を恐懼し、北京留任を執政楊一清に懇請せしに依り、北京吏部驗封司主事に改任せられ此の頃始めて朱陸の學を論ず。

二月

會試同考試官となり、時に吏部郎中、方獻夫、官位上なるも師禮を以て陽明に學を受く事切なり。

十月

文選清吏司員外郎に陞任せられ後、湛甘泉命を奉じて安南に使する砌、其の「別序」(全書卷七所收)を見るに陽明の深慨と其の甘泉に資する所、尋常ならざるを窺見するを得べし。

十一月  
十二月

同職に任じ在京

(陽明四十歲迄の巡歴は「陽明巡歴略圖」Ⅱ及びⅠ、參照)

四十歲 正德六年辛未、皇紀二二七一、西紀一五一

四十一歲 正德七年壬申、皇紀二二七二、西紀一五二

在北京 二月 同上

三月 考功清吏司郎中に陞る、徐愛、黃綰の門友、學を受く、

自四月 同官職に任じ在京。

赴南京十二月 南京太僕寺少卿に陞任せられて赴任す  
赴越十二月末 赴任の便道、南京工部員外郎に陞りし  
赴越十二月初

徐愛と同舟にて越に歸省の際、舟中に大學の宗旨を論ず。此の時、徐愛と學を論ぜし物は「傳習錄」上卷の首章に記載する所の物之なり。

四十二歳 正徳八年癸酉。皇紀二二七三、西紀一五一三

至越 二月 越に歸省。

登四明山五月 徐愛と共に上虞(餘姚の西南)より四明山に入り、白水を觀て龍谿の源を尋ね杖錫山寺に登り雪竇(四明山中)に至り千文岩に登り、以て天姥華頂の諸峯を望み、寧波より餘姚に歸る。是、山水の間に遊行をなすと雖も、實に意を專

ら徐、黃二子の教化に注ぎし物で蓋し默化の權法なりしなり。

四明觀白水二首

呂南富巖壑、白水尤奇觀、興來每恩往、十年就茲歡、停驂指絕壁、涉澗緣危蟠、百源旱方歇、雲際猶飛湍、霏霏瀝林薄、漠漠凝風寒、前聞若未愜、仰視終莫攀、石陰暑氣薄、流觸邇迴瀾、茲遊詎盤樂、養靜意所關、逝者諒如斯、哀此歲月殘、擇幽雖得所、避時時猶難、劉樊古方外、感慨有余嘆、千丈飛流舞白鸞、碧潭倒影鏡中看、藤蘿半壁雲烟濕、殿角長年風雨寒、野性從來山水癖、直躬更覺世途難、卜居斷擬如周叔、高臥無勞比謝安、(全書卷二〇外集二)

杖錫道中用張憲使韻

山鳥懽呼欲問名、山花含笑似相迎、

風迴碧樹秋聲早、雨過丹巖夕照明、  
雪嶺挿天開玉帳、雲溪環碧抱金城、  
懸燈夜宿茅堂靜、洞鶴林僧相對清。

(同上)

又用曰仁韻

每逢佳處問山名、風景依稀過眼生、  
歸霧忽連千嶂暝、夕陽偏於一溪晴、  
晚投巖寺依雲宿、靜愛楓林送雨聲、  
夜久披衣還起坐、不禁風月照人清。

(同上)

書杖錫寺

杖錫青冥端、澗壁環天險、垂巖下陡  
壑、涉水攀絕巘、溪深聽喧瀑、路絕  
駭危棧、捫蘿登峻極、披翳見平衍、  
僧遁寄孤衲、守廢遺荒殿、傷茲窮墟  
僻、曾未誅求免、探幽冀累息、憤時翻  
意慘、拯援才已疎、栖遲心益脊、哀  
猿嘯春嶂、懸燈宿西庵、誅萌竟何時

白雲愧舒卷。(同上)

五月 東福寺百七十一世及び南禪寺二百四十

二世の法燈を繼承せし庵桂悟は永正  
九年八十八歳を以て日本正使として入  
明、武宗皇帝は浙江寧波の育王山廣利  
禪寺に住せしめしが、明年五月歸朝す  
るに際し陽明親ら「送序」を作り(陽  
明の眞作か否か或は序の語句に關して  
疑をもつ)て之を贈る。即ち曰く。

世之惡奔競、而厭煩拏者、多遜而之  
釋焉、爲釋有道、不曰清乎、撓而不  
濁、不曰潔乎、狎而不染放、必息慮  
以澆屏、獨行以離偶、斯爲不詭於其  
道也、苟不如是、則雖皓其髮緇其衣  
梵其書、亦逃租繇而已耳、樂縱誕而  
己耳、其於道何如耶、今有日本正使  
推雲桂悟字了庵者、年踰上壽不倦爲  
學、領彼國王之命、來貢珍於大明、

舟抵鄞江之滸、寓館於驛、予嘗過焉見其法容潔修律行堅鞏、坐一室、左右經書、鈔采自陶、皆楚々可觀愛、非清然乎與之辨空、則出所謂預修諸殿院之文、論教異同、以竝吾聖人、逐性閑情安、不譁以肆、非淨然乎、且來得名山水而遊、賢士大夫而從、靡曼之色不接于目、淫哇之聲不入于耳、而奇邪之行、不作于身、放其心日益清、志日益淨、偶不期離而自異塵不待浣而已絕矣、茲有歸思、吾國與之文字以交者、若太宰公及諸精神輩、皆文儒之擇也、咸惜其去、各爲詩章以艷飾迢遞、固非貸而濫者、吾何得不序。

皇明正德八年歲在癸酉五月既望、

餘姚、王守仁

(伊地知潛隱「漢學紀源」卷二、

續々群書類從第十、教育部桂悟第二七

西村天因「日本宋學史」等參  
(尙東福寺誌  
齋藤拙堂拙堂文話卷二照)

と。其の所謂「皇明正德八年云々」は陽明四十二歳在越の時にして五月四明杖錫、雪竇に遊び餘姚に歸省の途次、寧波を過ぎ了庵の道價を慕ひ寧波の育王山廣利寺に赴き了庵に謁し禪儒を談ぜしならん。蓋し陽明は餘姚に歸途後該送序を作りて贈りし物にして陽明と了庵の會見は首肯し得らる。陽明と了庵との會見交遊(之に關しては詳細後日發表)は陽明の禪的思想及び禪的覺圍氣攻究上一新生面を提供する物として重視すべき價值ありと云ふべし。

至〇州 十月 馬政監となりて任地安徽省の 州に至



るも 縣の山水佳勝、然も地僻政務閑散なるを以て、門友との近郊瑯琊、濃泉の間に逍遙講學し、月明の夕には座を龍潭（龍蟠山）に移す。舊學の士、亦來り學び、從遊するの多き此の時より始む。

龍蟠山中用韻

無奈青山處處情、村沽日日辨山行、  
眞慚廩食虛官守、只把山遊作課程、  
谷口亂雲隨騎遠、林間飛雲點衣輕、  
長思澹泊還眞性、世味年來久絮羹。  
（全書卷二〇外集二 州詩內）

瑯琊山中三首

草堂寄放瑯琊間、溪鹿巖僧且其間、  
冰雪能回草木死、春風不化山石頑、  
六經散地莫收拾、叢棘被道誰刊刪、  
已矣驅馳二三子、鳳圖不出將還。  
狂歌莫笑酒盃增、異境人間得未曾、

絕壁倒翻銀海浪。遠山眞作玉龍騰、  
浮雲野思春前動、虛室清香靜後癡、  
懶拙惟餘林壑計、伐檀長自媿無能。  
風景山中雪後增、看山雪後亦誰曾、  
隔溪巖犬迎人吠、飲澗飛猿蹕樹騰、  
歸騎林間燈火動、鳴鐘谷口暮光凝、  
塵踪正自縉籠在。一宿雲房尙未能。

（同上）

山中示諸生五首

路絕春山久廢尋、野人秩病強登臨、  
同遊仙侶須乘興、共探花源莫厭深、  
鳴鳥遊絲俱自得、閑雲流水亦何心、  
從前却恨牽文句、展轉支嘆陸沉。

其二

流亦沂水、童冠得幾人、莫負詠歸興、  
溪山正暮春。

其三

桃源在何許、西峯最深處、不用問漁

人、沿溪踏花去。

其四

池上偶然到、紅花間白花、小亭閒可坐、不必問誰家。

其五

溪邊坐流水、水流心共閒、不知山月上、松影落衣班。(同上)

龍潭夜坐

何處花香入夜清、石林茅屋隔溪聲、幽人月出每孤往、棲鳥山空時一鳴、草露不辭芒屨濕、松風偏與葛衣輕、臨流欲寫猗蘭意、江南無限情。(同上)

在  
州<sup>十一</sup>  
十二  
月

政務の傍ら夜座を獎勵し門人の講學に力む。〔續く〕